

福岡県の名城

アクロス福岡文化誌7

アクロス福岡文化誌
編纂委員会編

海鳥社



那珂川町・一ノ岳城の石垣

福岡県の名城

アクロス福岡文化誌7

アクロス福岡文化誌
編纂委員会編

海鳥社

はじめに

アクロス福岡文化誌編纂委員会

先人たちが築いてきた文化遺産や風土——“ふるさとの宝物”を再発見し、後世に伝えていくことを目的に刊行している「アクロス福岡文化誌」シリーズ。第七巻のテーマは「城」です。

城といえば、皆さんは姫路城や大坂城のような天守や石垣のある城を真っ先に想像されるでしょう。県内でも、近世の四大藩の拠点である福岡城、小倉城、久留米城、柳川城は名城としてよく知られています。しかし、このような城が一般的になるのは近世以降で、中世には無数の山城が築かれ、さらに広義の城の歴史は、人類が定住生活を始めた頃にまで遡ることができます。

本書では、古代・中世・近世と時代別に分け、県内の主要な城の歴史や興味深いエピソード、構造的な特徴などを紹介しています。また、実際に現地を見学する時の

参考となるよう、今も残る遺構の解説や城跡へのアクセスなどの情報も盛り込みました。さらに巻末には、九州各地の名城を取り上げ、城をより深く理解するための用語集も収録しました。

本書の執筆は、各地の城に精通した方々にお願いし、最新の研究成果を踏まえた内容となっています。また、各地の教育委員会や博物館など多数の機関から、貴重な写真や資料をご提供いただきました。関係各位のお力添えに心より感謝申し上げます。

今も城の人気は衰えることを知らず、多くの関連書籍が出版され、現地ツアーなども盛んに行われており、城跡は地域振興の面でも重要な役割を担っています。城がこれほどまでに人々を惹きつけるのは、その様式美や機能美のみならず、様々なドラマを秘めているからでしょう。

福岡県内には千を超える城跡があるといわれており、本書で取り上げた以外にも、たくさんの貴重な城跡が存在します。皆さんも実際に現地を訪れ、先人たちの知恵と技術、思いに触れられてみてはいかがでしょうか。

古代の城

花尾城 北九州市八幡東区他 6

笠木山城 太宰府市他 56

岩屋城 太宰府市 58

長尾城 朝倉市 60

秋月の中世山城 61

筑前六端城 64

毘沙門岳城・住厭城 久留米市 68

鷹取山城 久留米市他 70

福島城 八女市 72

猫尾城 八女市 74

鷹尾城 柳川市 76

三池山城 大牟田市他 77

筑後の平地城館 78

門司城 北九州市門司区 80

長野城 北九州市小倉南区 82

松山城 菊田町 84

等覚寺城 菊田町 86

馬ヶ岳城 行橋市他 86

障子岳城 香春町他 88

高祖城 糸島市他 49

二丈岳城 糸島市 48

安楽平城 福岡市早良区 46 44

一ノ岳城 那珂川町 50

高島居城 穂志町他 52 50

許斐岳城 宗像市他 53 52

葛岳城 宗像市他 54

雁股城 上毛町他 96

宇都宮氏の城館 97

香春岳城・鬼ヶ城 香春町 90

戸代山城 赤村 92

岩石城 添田町他 94

久留米城 久留米市 118

直方陣屋 直方市 120

柳川城 柳川市 128

松崎陣屋 小郡市 126

秋月城(陣屋) 朝倉市 110

福岡城 福岡市中央区 108

名島城 福岡市東区 102

小倉城 北九州市小倉北区 100

唐津城 名護屋城 佐賀城 100

平戸城 島原城 100

岡城 熊本城 100

糸島城 府内城 100

祇肥城 鹿児島城 100

阿蘇城 首里城 100

九州名城紀行

唐津城 名護屋城 佐賀城 136

平戸城 島原城 136

岡城 熊本城 136

糸島城 府内城 136

祇肥城 鹿児島城 136

近世の城

城郭用語集 150

より詳しく知るための参考文献案内

157

福岡城

| 所在地 | 福岡市中央区城内 舞鶴城 |
|-----|--|
| 別名 | アクセス 福岡市営地下鉄 城内美術館東口、大手門 レーブルス「ブリーフ」 |

福岡城
ふくおかじょう
アクセス 福岡市営地下鉄空港線赤坂駅もしくは大濠公園駅から徒歩8分／西鉄バス平和台・鴻臚館前城内美術館東口、大手門の各バス停から徒歩5～8分、赤坂3丁目バス停から徒歩10分／福岡シティループバス「ぐりーん」⑨平和台・鴻臚館前または⑩福岡城址・福岡市美術館東口から徒歩5分

黒田父子による築城

豊前国京都・築城・仲津・上毛・下毛・宇佐六郡を領した中津城主・黒田長政は、慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原合戦において徳川家康率いる東軍に属した。長政は、福島正則ら諸将を説得し東軍に味方させるとともに、西軍に属した小早川秀秋を東軍に寝返せた。工作をするなど、東軍の勝利に大きく貢献した。合戦後、その功績により長政は、筑前国ほか一国を与えられ、同年十二月に中津城から前領主・小早川秀秋の居城・名島城に入った。

はあつたが、領内支配の中心地となる城下が狭小だったため、長政と父・黒田如水は新たな城郭を建設することとした。福岡藩の儒学者・貝原益軒が編んだ「黒田家譜」によれば、建設候補地は住吉、箱崎、荒津山（荒戸山、現在の西公園）、福崎の四カ所で、最終的に如水と長政は福崎が適地と判断しここに築城することとなつた。

築城は、嶋井宗室や神屋宗湛ら博多町人の資金拠出を得ながら、慶長六年から開始された。石垣普請は、黒田二十四騎の野口一成と益田正親を奉行とし、名島城の石垣や周辺の古墳の石材を転用し、加えて唐泊など博多湾西部

地域から石材を調達して行われた。築城は急ピッチで進められ、翌七年には本丸を始めとする内郭が完成、長政が本丸に移り住み、同十一月には東の丸（現在の福岡地方裁判所付近）で黒田忠之（くろだゆきゆき）が生まれている。さらに同八年には大堀と外郭が完成し、豊前国との国境に築かれた支城（六端城）を含めた全体の完成には約七年を要したと考えられている。

新しい城は、黒田家ゆかりの地である備前国邑久郡福岡（現在の岡山県瀬戸内市長船町）の地名から「福岡城」と名づけられた。福岡城は、初代藩主・長政から十二代・長知に至るまで、



「正保福博惣図」(福岡市博物館蔵)。正保3(1646)年に幕府へ提出された城絵図の控図。城下町として福岡だけでなく博多まで描かれている。下は中心部を拡大したもの



城下町福岡・博多を見渡す平城

福岡藩黒田家の居城として領内支配の中心地であった。

福岡城は、赤坂山の南から続く丘陵地の北端を本丸とし、二の丸、三の丸を配する平城形式の城郭である。本丸

の高さは二三mで二の丸、三の丸へと緩やかな階段状となっている（内郭）。本丸の南側は丘陵地とながつていてので切通しと堀が設けられ、内郭の周囲には堀が巡らされていた（内堀）。

内郭の西側には入江を利用した大堀と荒津山の西側に堀が二カ所設けられ、東側は中堀、肥前堀（佐賀堀）が四十川（現在の薬院新川）と那珂川の合流地点まで続いていた。

城下町・福岡には門が六カ所（東取入口南・北、春吉門、薬院門、赤坂門、西取入口）設けられ、これらに囲まれた範囲（那珂川、肥前堀、中堀、内郭、築堀、博多湾に囲まれた範囲）が福岡城の外郭である。さらに外側には博多や肥前堀・中堀南側の武家屋敷、西は樋井川までを含めた惣郭の存在も想定される。

本丸には藩主の住居と政務の場所として本丸御殿があつた。二代藩主・黒田忠之以降には、三の丸に藩主の居屋

（一六四四—四八）には大堀沿いに家老屋敷が、二の丸沿いに藩主の居屋敷が配置された。この居屋敷は寛文十一

（一六七二）年には高屋敷西側に移され、御下屋敷または西ノ丸と呼ばれ、以降、幕末まで位置は変わらなかつた。

御下屋敷は藩主の住居や生活の場であるとともに、勘定所や郡役所など諸施設がある藩政の場として機能した。

市民憩いの場——舞鶴公園・大濠公園

現在、福岡城跡の内郭を中心とした四八万m²は国指定史跡であり、石垣も大部分が往時のまま残っている。本丸から三の丸一帯は舞鶴公園（昭和二十三年開園）となっており、梅や桜を始めとする四季折々の自然が楽しめる。公園内には平和台陸上競技場やテニスコート、ラグビー場などのスポーツ施設が整備され、多くの市民で賑わっている。

昭和六十二（一九八七年）年、園内にあつた平和台野球場の外野



復元された下の橋御門と伝潮見櫓（斎藤英章氏撮影）

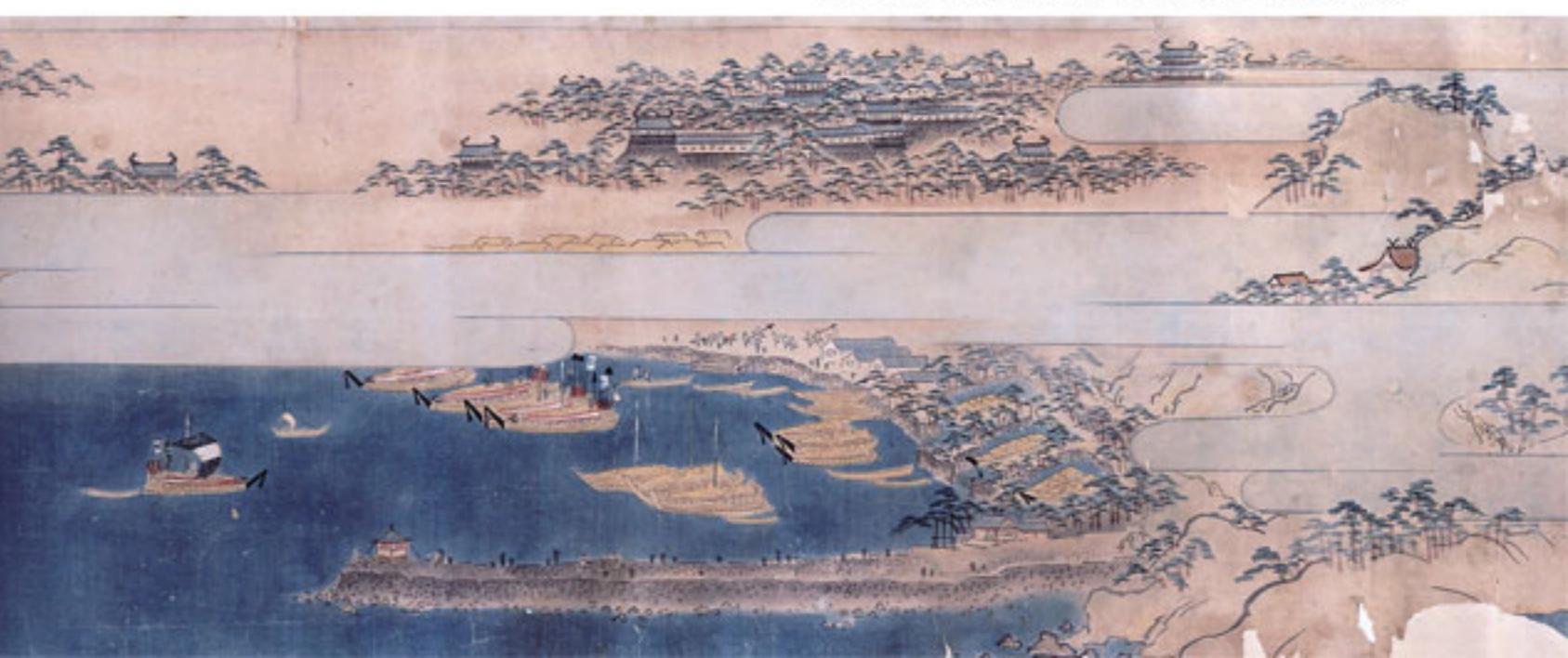
敷が建てられ、本丸御殿は儀礼の場として使用された。

また、従来、福岡城の本丸には天守が存在しなかつたというのが定説であった。しかし、近年、天守の存在を示唆する史料が数点確認されており、その存否についての議論が深まつてきてている。

二の丸は二ノ曲輪ともいい、東部には藩主世嗣が江戸から帰国した際に居住する屋敷があり、本丸南西に位置する南の丸は城の南側の防御を担い、江戸時代初期には城代屋敷が置かれていた。

三の丸は、黒田如水の隠居所であった高屋敷（鷹屋敷、現在の牡丹芍薬園）と、松の木坂を結ぶ石垣を境に東部と西部に分けられた。東部には、時期によつて屋敷割に変化があるものの、江戸時代を通じて家老屋敷が置かれた。西部には、築城当初は代官町として中級家臣の屋敷が置かれたが、正保期

18世紀頃の福岡・博多を描いた「福岡図巻」（部分、福岡市博物館蔵）。博多湾側から見た福岡城の外観が描かれている



スタンド改修工事に伴う発掘調査により、古代の对外公館であった鴻臚館の遺構が発見された。現在までに奈良時代以前の堀と門、奈良時代の堀や掘立柱建物などの遺構や中国越州窯青磁、イスラム陶器、西アジアガラス器など国際色豊かな遺物が出土し、国指定史跡となつていている。

また、園内には福岡城の建築遺構も、当初の位置もしくは移築されて保存されている。南の丸にある多聞櫓（本章扉写真参照）は、江戸時代と同じ位置に立つ唯一の建物で、昭和四十七年から同五十年にかけて解体・復元され、重要文化財に指定されている。

下の橋御門は福岡城の門で、本来の位置で現存する唯一の門である。本来は二層の櫓門であったが、昭和九年以前に一層の平門に改められていた。昭



旧母里太兵衛邸長屋門。昭和40年に現在地に移築された

れている。なお、本丸の北側の出入口であつた本丸表御門（県指定有形文化財）は、祈念櫓と同じく大正七年に崇福寺に払い下げられ、現在は同寺の山門として使用されている。



本丸の東北隅に立つ祈念櫓（斎藤英章氏撮影）

和三十二年に県指定有形文化財となり、平成十二年に不審火で焼失したが、焼け残った部材を再利用し、本来の櫻門として平成二十年に復元された。

県指定有形文化財の潮見櫓である。本櫓は大正時代に本丸南側にあつた武具櫓や本丸裏御門（いずれも昭和二十年の福岡大空襲で焼失）とともに浜の町の黒田家別邸に移築された。第二次大戦後、別邸が検察庁に譲渡されるにあたり解体され、昭和三十一年現在地に復元された。しかし、平成三年、福岡城の月見櫓を移築したと伝えられた、黒田家の菩提寺・崇福寺（福岡市博多区）の仏殿から潮見櫓を移築した旨の棟札が見つかったため、本櫓の名称が不明となってしまった。近年の研究により、本櫓は本丸裏御門の西側に立つていた太鼓櫓（古時打櫓）であつたと推定されているが、今のところ

「伝潮見櫓」と通称する事が多い。本丸の東北隅にある祈念櫓（県指定有形文化財）は、鬼門封じの祈念をするために建てられた二層の櫓である。本櫓は、大正七（一九一八）年に陸軍省から崇福寺へ払下げられ、末寺の

衛邸長屋門が立つてゐる。これは福岡市中央区天神二丁目の野村證券福岡支店にあつた母里家の屋敷の長屋門で、昭和四十年に現在地に移築された数少ない武家屋敷の遺構である。

内堀北側の一部は、明治四十三（一九一〇）年の路面電車の開通（福博電気軌道・福博本線）に伴って埋め立てられたが、昭和五十三年の市営地下鉄工事の際に調査され保存されている。明治通り沿い福岡地方裁判所前に地下への入口があり、毎週土曜日十一十七時に公開されている（年末年始の土曜は非公開）。

本丸の西側の大堀は、昭和二年に開催された東亞勸業博覧会の会場として使用するため、大正十四年から造園工事が行われ、昭和四年に県営大濠公園として開園した。園内には福岡市美術館（昭和五十四年開館）や能楽堂、日本庭園などの文化施設があり、散歩やジョギングを楽しむ人々で賑わってい



明治期に撮影された上の橋御門（福岡市博物館蔵）

る。また、毎年八月に開催される西日本大濠花火大会は、四十五万人前後の観客が訪れる福岡市の夏の風物詩となつてゐる。

大正寺（北九州市八幡東区）に移築され観音堂として使用されていた。昭和五十八年に同寺から本来の場所へと戻されたが、現在の外觀は旧来のものとは大きく異なつており、大正寺に移築された際、改変を加えられたと考えら



崇福寺の山門として残る本丸表御門